

「するとイエスは答えて言われた。『聖書にこう書いてある。『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きるものである。』』」(申命記 8.3)

悪魔はイエスを誘惑したのです。「あなたは神の子ですから、この石にパンになるように命じなさい。」

「こう書いてあります...」イエスは律法、詩篇、預言者の中で語られたすべての言葉を成就するために生きました。イエスは旧約聖書の靈感と権威を信じ、そのすべてに従いました。

「人は生き続けることはできない...」イエスは申命記を愛し、他の旧約聖書のどの書よりも多く暗記して引用しました。これは申命記 8 章 3 節からの引用です。イエスは神の言葉を毎日食べ、個人的な犠牲が何であれ、たとえ死に至るまでもそれに従うことを信じていました。

イエスは誘惑に対して、自分の言葉ではなく、神の言葉で答えました。この点でイエスは私たちの模範です。悪魔は嘘つきであり、すべての嘘の父です。真実は偽りの毒に対する解毒剤です。神の言葉は真実であり、イエスが真実であるのと同じです。イエスは聖書のすべての言葉が重要であり、食物以上に毎日養われ従うべきであると信じていました。誘惑に立ち向かう最良の方法は、神の言葉の真実です。

これは救世主の誘惑でした。悪魔はあなたや私を誘惑して石をパンに変えさせることはできません。そんなことは決して起こりません！それは妄想です。しかし、無から宇宙を創造した神は、望むことを何でもする力を持っています。悪魔の誘惑は非常に巧妙で、イエスに神の力を自分の利益のために使うようにと誘惑しました。よく考えてみてください。イエスは神の力を自分のために使ったことは一度もありません。十字架上で嘲笑されてイエスに投げつけられた言葉は、彼の正義の道徳的性質ゆえに真実でした。「**彼は他の人を救った。自分自身を救うことはできない。**」罪深い人々の間では、「絶対的な力は完全に腐敗する」というのは本当です。しかし、イエスは罪がなく、神聖で、愛に満ち、純粹でした。40日間の断食の後に自分自身に食物を与えるという正当なことでさえ、自分の利益のために力を使うことはありませんでした。

考えてみてください。後にイエスは、大麦パン 5 個と小魚 2 匹を、5,000 人の男性と女性、子供を養うのに十分な量の食物に変えました。イエスは食物を創造するために神の奇跡的な力を使いましたが、それは自分自身のためではなく、他の人のためでした。父なる神の言葉は、イエスが三位一体の人生を生きるための道筋を保ったのです。イエスが後に「天と地のすべての力」と呼ぶものを使い、管理して、犠牲的に他の人を祝福し、養い、愛しましたが、その力を決して自分の利益のために使用しませんでした。

正当な権力を行使して自らの利益を得るよりもむしろ飢えを選ぶイエスの無私で人間的な飢えの中に、私たちは神の純粹さ、神聖さ、そして道徳的美しさを垣間見ることができるのです。皆さ

んはどうか分かりませんが、私はイエスのこのような姿を見ると、ひれ伏して彼を崇拝したくなります。

「イエスは彼（悪魔）にこう言われた。『またこう書いてある。『あなたの神である主を試してはならない。』』（申命記 6.16）

神殿の頂上に連れて行き、詩篇91章1節から12節にある、天使たちがイエスを支えて守ってくれるという約束を引用して、イエスに飛び降りるよう促した。

「こうも書いてあります...」イエスは、悪魔による聖書の誤った適用に対して、再びデュエット書、今度は第6章から、ご自身の聖書の正確な適用で答えました。（3回目の誘惑に対するイエスの答えも同じ章からのものでした。）

「あなたの神である主を試してはならない。」申命記 6 章 16 節の全文は、神の民がメリバ/マッサで神を試した方法について述べています。（「主を試し」ることで彼らがどのように罪を犯したかを理解するには、出エジプト記 17 章 1-10 節の全文を調べてください。）

彼らは、明らかに神が導いた場所で、彼らの必要物（水）を供給する神の能力に疑問を抱きました。私たちの必要物を供給するという神の約束（聖書にたくさん記されています）はすべて、神の意志を行うことを条件としています。神は、神の意志が要求するものを供給します。彼らはそれを疑っていました。

一方、神殿の屋根から飛び降りることは、イエスに対する父の意志とは何の関係也没有ありません。そもそも、イエスをそこに導いたのは悪魔でした。それは、父のイエスに対する計画に「必要」がないのに、天使を送って超自然的に介入するかどうかを父が「試す」こと以外の目的はありませんでした。それは、神と「チキン」ゲームをするようなものです。

イエスはそれを一切受け入れませんでした。イエスは、父が御心を行うために必要なものはすべて与えてくださることを知っていました。イエスはその真実を「試す」必要はありませんでした。イエスは生まれたときからその真実に従って生きており、父の忠実さに欠けるところを感じたことは一度もありませんでした。

マタイとルカはイエスの誘惑を異なる順序で記述しています。これは両者の記述に矛盾があるという意味ではありません。なぜでしょうか。それは、マタイは実際の時系列順に記述することを意図していたのに対し、ルカはそうしなかったからです。マタイは物語の中に「それから」という時間を表す用語を含め、出来事の順序を示しています。ルカは記録にこの用語を含めていません。ルカにとって、内容は 三つの誘惑のうちどれが重要かが重要であり、それらの正確な順序が重要ではありません。

読者の私たちは、ルカが年代順にリストアップしていると思うかもしれませんが、それは彼の意図ではありませんでした。一方、マタイは年代順に展開することを意図していました。(これは興味深いことです。なぜなら、ルカは通常、年代順にアプローチしますが、マタイはそうではないからです。著者はいつでも自分の典型的なパターンを変更する完全な自由を持っています。)したがって、これら2つの記述はまったく矛盾していません。

一見些細な点に思える点をなぜそんなに大げさに扱うのでしょうか。それは、それが聖書解釈の重要な原則の例であり、この2番目の誘惑における悪魔に対するイエスの答えを理解する鍵となるからです。

重要な点は次のとおりです。言葉は、聞き手や読者が意味してほしいことではなく、著者や話し手が伝えたいことを意味します。

意味は常に書き手/話し手の意図によって決まります。

実際に意味していることの間にある大きなギャップです。たとえば、私はあなたに「湖に飛び込め」と言います。その命令で私が意図しているのは、「私はあなたに同意しませんし、これからも同意しません」ということです。議論の文脈では、あなたはそれをよく理解しています。しかし、私が文字通り「言った」とことと私が「意味する」ことを意図したことを混同すると、あなたは文字通り湖を見つけて飛び込まなければなりません。コミュニケーションとは、送り主が意図することを意味します。マタイは上記の時系列を意図しましたが、ルカはそうしませんでした。したがって、矛盾はありません。では、イエスの2番目の誘惑に移りましょう。

悪魔はイエスに聖書の言葉を正確に引用しました。(驚くべきことに、悪魔はほとんどの弟子よりも聖書をよく知っています。これは非常に危険な状況です。)しかし、悪魔は聖書の意味を巧みに「ねじ曲げ」、イエスに誤った解釈をしました。

神は詩篇91篇11-12節の約束を決して意図しなかった。無条件で、あらゆる状況に普遍的に適用可能であること。そうでなければ、神はすべての信者に天使の飛行力を与えていることになります。私たちはみな、地球上のあらゆる高い場所からスカイダイビングし、非常に柔らかく安全に着陸する喜びを味わうことになります。結局のところ、それが文字通り約束が「言っている」ことです。

詩篇91章の約束は、神の意志に完全に従順であり続けるために「神の国と神の義とを第一に求めている」人々に適用されるよう神によって意図されています。イエスは父の意志を行うために神殿の屋根から飛び降りる必要はありませんでした。その行為は父がイエスのために立てた計画とは何の関係もありませんでした。イエスはそのことをよく知っていました。イエスは、まさにその状況で直接、そして意図的に自分に当てはまる聖書の言葉で答えました。

神が語られた意味と一致しない聖書の解釈は、間違っており、偽りです。神がそのテキストに本来意図した意味を保たない聖書の適用は、間違っており、誤りであり、最終的には罪深いものです。私たちが神の言葉を誤って解釈し、神が私たちの期待通りに行動してくれないことがわかったとき、神は責任を負いません。完全に私たちの側に責任があり、神に責任はありません。はい、これはいつも起こります。私たちは意図しない湖に飛び込んだのです。

「イエスは彼（悪魔）にこう言われた。『聖書にこう書いてある。『あなたの神である主を拝み、ただ主にのみ仕えよ』』（申命記6.13）

悪魔はイエスに世界のすべての王国を見せ、イエスが悪魔を崇拝するという条件でそれらをイエスに提供しました。

「こう書いてあるから…」イエスはここで「…」という助詞を使って議論を締めくくり、「サタンよ、去れ」という命令を裏付けました。「崇拝する」と「仕える」という動詞は、これらは未来時制であり、文字通り「崇拝/奉仕する…」と翻訳されることが多いです。これは未来時制の特別な用法であり、未来時制で命令形の意味を意図しているため、私は命令形を使用しました。

10の戒律はすべて、出エジプト記20章でこの未来形の使い方で実際に与えられており、申命記6.13はイエスが引用したものです。(英語でも同じことをします。親は「あなたはおもちゃを片付けるでしょう!」と言うかもしれません。その文脈でのポイントは、将来おもちゃを片付けることではなく、今です!) イエスは神との正しい関係の最も基本的な原則を再度述べています。神が本当はどのような方であるかを畏敬の念と尊敬の念を持って認識し、神のような存在は他にはいないことを認識し、神の排他的な性質は神だけを崇拝することを必要とします。

(1) 悪魔の誘惑もまた、非常に巧妙で巧妙な欺瞞に基づいていました。ルカは、マタイの福音書よりもさらにこのことを明らかにしている悪魔のさらなる発言を記録しています。「このすべての権威と栄光をあなたに与えます。それは私に委ねられているのです。そして、私が望む者に与えます。」4.6本当はそうではありません！

壮大な「栄光の王」詩篇第24章を考えてみましょう。「地とそこにあるすべてのもの、世界とそこに住むすべてのものは主のものである。主は海の上にこれを基とし、水の上にこれを堅くされたからである。」24.1, 2。では、「この栄光の王とは誰ですか？」悪魔ではないことは確かです！「万軍の主、彼こそ栄光の王です。」24.10だからこそ、詩篇第2章は父（悪魔ではない）が息子に言ったと記録されています。「私に求めなさい。そうすれば、諸国をあなたの相続地とし、地の果てまであなたの所有としよう。」2.8

悪魔はこれらすべてが「自分に引き渡された」と主張しましたが、それは真実をねじ曲げる彼のトレードマークでした。確かに、悪魔はイエスと聖書によって「この世の支配者」と呼ばれてい

ますが、それは大嘘つきが人々を騙して人生で権力を与えることに成功したという事実を機能的に認めたものであり、神が悪魔にすべての権威を与えたからではありません。もしイエスがこの誘惑に屈して悪魔を崇拝していたら、悪魔は結局実際には支配していないことに気づいたでしょうし、すべてが無駄になっていたでしょう！ もちろん、イエスはこの嘘を見抜いて、言葉の真実でそれを吹き飛ばしました。

(2) この誘惑はメシア的なものであり、十字架の苦しみなしに玉座の栄光に到達できる (偽りの) チャンスとしてイエスに訴えた。父なる神は、上記の詩篇2.8の約束をイエスに与えた。しかし、8節は2.7節に先行している。これは、新約聖書で何度も引用されている復活への直接的な言及です(使徒行伝 13:33、ヘブライ人への手紙 1:5、5:5)。復活の前に十字架の苦しみがあります。イエスは後に祈ります。「父よ、もしできることでしたら、どうぞこの杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、あなたの思いが成るようにしてください。」マタイ 26:30。悪魔の申し出はそもそも現実のものではなかったが、イエスにとっては検討する価値のある非常に魅力的なものだった。王が十字架から王冠を奪おうとしなかったことに、あなたの王の美しさ、純粹さ、神聖さ、正義が表れている。

(3) イエスはまた、悪魔に、イエスを誘惑するのではなく、むしろイエスを崇拝し仕えるべきだと巧妙に思い出させています。サタンは、第一級の条件文構造「あなたは神の子であるから...」を使って、イエスが神の子であることを知っており、認めていました。したがって、父だけでなく子もまた、崇拝に値し、当然の崇拝の対象です。詩篇2 章 10-12 節には、次のように続いています。「恐れをもって主に仕え、震えて喜べ。御子を拝め。そうしなければ、主はあなたに対して怒られない。」

マタイ伝2章10節では、イエスはすでに誕生時に崇拝されていた。は、 14 :32で一言で嵐を静めた後、マタイの福音書の28:16-20の終わりに「すべての権威」を持つ者として最終的に崇拝されるでしょう。そこでイエスは誘惑を悪魔に対する「叱責と指導」の機会に変え、悪魔はそれをすべて拒絶しました。